

書評

青木省三 著

時代が締め出すところ 精神科外来から見えること

加藤 敏

比較的最近の「ヨーロッパ神経薬理学誌」にて、EU全体における2010年1年間の精神疾患有病率の調査結果が公表されている(Wittchen HU, et al, 2011)。それによると、EUでは100人のうち実に38人余りが不安障害やうつ病をはじめとした何らかの精神疾患を抱えている。驚くほど高い有病率である。またWHOは2008年に、寿命、健康喪失の大きさ(DALY値)を尺度に世界69億を超える人を対象にして行った病気の統計報告(2004年時)を発表した。それによると、呼吸器感染症、消化器感染症に次いで第3位にうつ病があげられている。日本についてDALY値をみると、うつ病が第1位で、認知症、統合失調症、双極性障害、自傷などトップテンに精神疾患関連の疾病が5つ入っている。

こうした疫学知見は、グローバル化の現代、先進国、また途上国においても事例化する精神疾患が増えていること、他面で、精神疾患の発症に際し、遺伝子だけでなく、社会・文化の影響も無視できないことを指し示す。

その意味では、本書『時代が締め出すところ』は、まさしく高度資本主義が世界のすみずみにまで波及した現代という時代が、いかに人のところに大きなきしみを与え、失調をもたらしめているのかを、日々の臨床実践現場からつぶさに報告した著作である。そこでは、外来主治医として自らかかわった多数の事例をもとに、どのように著者が患者さんの病態を診立て、治療的対応をしたのかがスリリングに描かれ、的確な説得力ある治療姿勢や指針がいくつも提示される。

扱われた事例では広汎性発達障害がもっとも多い。まず印象的なのは、「広汎性発達障害」の言葉自体はほとんど使用されず、「広汎性発達障害の傾向をもつ」人というように「傾向」の言葉が付加されている点である。そこには、広汎性発達障害を実体化する還元的思考から距離をおく以下のような可塑性を重視する考え方が明示される。「広汎性発達障害の傾向をもつ人は、危機的なときに広汎性発達障害らしくなる。しかし状況が改善すると、広汎性

発達障害らしさが『消えて』しまう人が結構いる」。「はじめて出会った時には、いかにも広汎性発達障害らしかった人が危機をすぎると『普通』の人になっていくことは稀でない」。「だから一時点の症状を切り取って診断することは危険である」。

3歳児検診が励行されているわが国では、最近、この時点で自閉症の診断が下されることが少なくない。また、子どもにこの診断を下された母親が、絶望し、自殺を図ってしまう事例さえある。著者の状況論的な柔軟な視点は、自閉症の早期診断に対し一考を促すものであると思う。

パーソナリティ障害に関しては、次のような態度が明言される。「私はパーソナリティ障害という言葉を使える限り用いないようにしている」。「パーソナリティという『その人らしさ』を形づくっているものは、できる限り治療しないというのが私の治療姿勢である」。

いわゆる過度の精神医学化に批判的な態度を打ちだす著者は、精神医学の言説でもって治療をすることがかえって侵襲的になるのではないかという慎重な配慮をしながら、患者に向かうことの重要性を、事例をもって随所で説く。たとえば、自殺を企図しながら、精神疾患を否定している患者に対し、「精神疾患であることを伝えること自体が男性の自立感情を大きく傷つけてしまい、二次的にうつ病や適応障害を作る要因にさえなりかねない」と私は考えた」という条りがそれである。

以上、ごく一部紹介したことから容易にわかると思うが、本書は精神科臨床において患者のよい部分をいかに引き出し、治療をするのかという前向きの姿勢が示され、大変啓発的である。「現代精神科医療における実践理性の書」と高く評価できるこの著作によって、DSM精神医学において全く欠落してしまった感のある治療における繊細なる精神を学ぶことができるので、ぜひ一読をお薦めしたい。

(自治医科大学教授精神医学教室)

●四六判 1,216頁 2010 定価 2,350円(本体 2,100円+税) 岩波書店